
学園黙示録 もう一人の三年生

じゃんじバル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園黙示録 もう一人の三年生

【Nコード】

N9776P

【作者名】

じゃんじバル

【あらすじ】

この作品は作者が気分転換と暇つぶしで書いた作品です。内容の出来や、矛盾点は気にしないでください。

一応確認はしていますが、誤字脱字はきつとたくさん出ています。見つけた際はご連絡ください。

一部の設定でデッドライジングの設定を盛り込んでいます。たまにデッドライジングのキャラの名前などが出てきますが、登場

はしません。

基本的には漫画版の設定で描きます。アニメ版なんて知りません。

最悪な目覚め

周りが五月蠅く、寝ていられない。

「…やかましいな」

思わず目を覚ました俺は保健室のベッドから身を起こし、呟く。
別にどこかを怪我したとか、気分が悪かったというわけではない。
ただ単純に眠かっただけで、適当な理由をつけて保健室で眠ったら
その眠りが深かったというだけだ。

「先生、何でこんなに五月蠅いんですか」

「えーと、その。リビングデッド化した生徒が沢山？」

「…はあ？」

近くにいた先生に五月蠅さの原因を聞いてみるが、分かるようで分からない先生の答えに思わず首をひねる。

リビングデッドは知っているが、それが沢山とはどういう事だ。

あんなのが現実にいるわけもあるまい…俺は未だに夢の中というところか？

夢のなかなら何が起きても不思議ではないからな。

しかし、こんなはつきりとした夢もないだろう…と言う事はやはり現実なんだな。

「先輩っ！？今頃起きたんですか!？」

「誰だ、君は」

声のした方向を向くと、同学年である三年生では見たことがない生徒が立っている。

同学年では無いということは、必然的に下級生ということになる。
俺は三年生だからな。

もちろん存在感がなくて、今の今まで気づいていなかっただけという可能性もあるのだが。

そして何故俺の事を三年生だと知っていたかも気になるが、俺は居合道部の主将なので知っていてもおかしくないか。

「今は自己紹介してる暇なんて無いですよ！

とにかく先輩も逃げましょう！今のここはまるで地獄……！」

次の瞬間、名も知れぬ下級生の後ろの窓ガラスが割れ、うちの制服を来た人間……のようなモノが大量になだれ込んできた。
長つたらしいので、人間のようなモノは以後奴らと呼ぶ。

そして俺は奴らをみて思い出した、数年前のアメリカでも同様の事件が起きたこと。

フランク・ウエストなる人物が『アメリカ政府の陰謀で、奴らは創り出された』ことを暴いたこと。

その奴らはある寄生虫が原因で創りだされているということ。

……おおかた、アメリカから輸入したモノに寄生虫がいたんだろうな。

「検疫の怠慢が今回の原因だということか、やれやれだな」

「いきなり何を言って……ぐわああ」

名も知れぬ下級生が奴らに噛まれた。ものすごく痛そうだ。

「先生！先輩！早く逃げて……！」

奴らに噛まれながらも、俺と先生の心配をする名も知れぬ下級生。
案外冷静なんだな、普通の人間なら激痛に叫んでしまいそうな物なのだな。

しかし冷静と言えば…俺も冷静だな、非常時にここまで思考ができるとは。

「ひっ…」

恐怖におののく声が聞こえる。

保健室に侵入した奴らが、先生の方にも向かっていた。

流石に寝ぼけている場合ではないか…未だに眠いんだがな。

「…」

ベッドから飛び起き、奴らへと駆け寄って足払いをかける。
転んだところに…

「ふんっ！」

奴らの頭部に、思い切った蹴りを何度もお見舞いする。

奴らの頭をボールへと見立てたサッカーボールキックだ。

何度も蹴りを打ち込んでいる内に、首が飛んでいき奴らは動かなくなった。

しかし、いくら全力だとは言え…蹴りを何度か打ち込んだだけで首が飛ぶとは…

まあ、おおかたりビングデッド化したときにでも脆くなっていたのだろう。深くは考えないようにした。

奴らは既に人ならざる身…問題などどこにもない、どこにもないのだ。

「先生、大丈夫ですか」

「…」

先生は無言でコクコクと頷く。

怪我も見当たらないし、本当に大丈夫なんだろう。

「しかし…数が多い。このままじゃ俺達も奴らの仲間入りだ」

一体仕留めたところで周りを見回し、思わずばやいた。

保健室にはまだ数体奴らが残っている、廊下にもかなりの数の奴らの数が見えた。

歩いてくる影もあれば、走る影もある。その走る影は木刀を構えて辺りの奴らを叩きながら一直線に保健室…

む、『木刀を構えて辺りの奴らを叩きながら』だと？

「はあっ！」

走る影は保健室に踊りこみ、手にした木刀を振り抜き奴らを打ち倒す。

的確に打ち込まれた木刀は、奴らを倒すには十分な威力を持っていた。

…そしてその一撃で、保健室にいる奴らの掃討が完了した。

「翔、ここにいたのか」

「…冴子か、助かったぞ」

保健室に流れこんできた影の正体は剣道部の主将、毒島冴子だった。

「翔の事だから、真っ先に居合道部の部室に向かっていると思っていたが…」

「眠かったから保健室で寝ていただけだ」

俺自身が剣道の段位持ちなので、何度か剣道部の助っ人に行ったこ

ともある。

そうやっているうちに仲良くなったのが、この冴子だ。

…一応言っておくが、名前で呼び合っているからと言って付き合っているわけではない。

「とりあえず会話はあとだ…」

私は毒島冴子だ、君の名前は？」

冴子は振り返り、奴らに噛まれて瀕死の重傷を負い、息も絶え絶えな下級生に名を聞いた。

「石井…」

血を吐きながら、答える下級生。
どうやら石井と言う姓のようだ。

「…奴らのような姿を親兄弟や、友達に見せたくないだろう？
見せるのが嫌ならば…私が介錯してやろう」

「お…お願いします…」

介錯をする、つまりそれは冴子が石井を殺すと言う事。

そしてその問いに笑いながら答える石井。

…死ぬ間際に、しかも望んだとは言え他人に殺されるのに笑うとは
な…大した男だ。

「ちょ、ちょっと何を…」

「待て、先生。石井が望んだ以上…邪魔をしてはいけない。
人として生まれた以上、人として死ぬべきだ」

やはりと言うべきか、先生が止めに入る。

教職である以上…目の前で生徒が殺すのも、生徒が殺されるのも避けなければならぬ。

しかしそれは…普通に生活出来る時の話だけだ。

「そうだ…人は人として死ぬべき。

そして、男の誇りを守ってやる事こそが」

冴子が木刀を振りかぶり…

「女たるの矜持なのだ」

木刀を振り下ろし、石井が血を撒き散らし死んでいった。
石井は最後まで笑っていた。

職員室へ

「さて…これからどうする」

奴らの駆逐が済んだ保健室で俺は話題を振った。

駆逐が済んだと言っても、保健室は四方八方を奴らに囲まれている。そんなに時間は取れない、話は早く済ませないとな。

「とにかくここから逃げないと…」

職員室になら車のキーがあるから、それで逃げられるわ」

先生が職員室へ行くことを提案する。

確かに車があればこの場からの脱出は可能だろう、奴らから逃げ切れるかという話になると…わからないが。

「車のキーか…逃げるにせよ逃げないにせよ、足は必要か。

翔の意見は？」

「…武器が必要だな。俺は一応徒手空拳でも戦えると思うが、先生はそういう訳にもいかない。

戦えと言ってるわけではないが、何か身を守るものは持っていたほうがいい」

「なるほど、私だっけいつも先生を護れるわけじゃない。

剣や銃とまではいかなくても、護身用の武器は必要だな」

そう、冴子が言っているようにいつだって先生の傍にいられるわけじゃない。

何らかのトラブルではぐれる可能性だって十分にある、そんな時の為に武器は必要だ。

近寄れずに攻撃できる銃やボウガンがあればいいんだが…アメリカ

ならいざ知らず、銃火器なんて日本国内には限られた場所にしか無いだろう。

警察署や自衛隊の駐屯地、暴力団の事務所やなどにしかあるまい。あとは狩猟団体やクレー射撃で使う銃ぐらいか。

「刺又が職員室にあるはずよ。

もしかしたら、他の先生方が持って行ってるかもしれないけど…それでも行ってみる価値はあると思う」

刺又か…あれに殺傷能力などないが、思い切り振り回せば時間稼ぎぐらいは出来るかもしれない。

それにいちおう金属製だろうし、包丁やナイフなどの刃物をテープでくくり付ければ、槍がわりにはなるだろう。

リーチもあるし、何も無いよりはマシか。

「分かりました、職員室に行くことに俺は賛成です。

職員室なら刺又が無くとも、先生方が持ち込んだ食料や飲料などが多少なりあるでしょうからね。

車のキーも取りに行かなければなりませんし」

「そつえば居合道部の部室に刀は無いのか？」

冴子 생각이出したかのように口を開いた。

「…部室には一本だけある。

模造刀だが馬鹿な後輩がよく研いだせいで、もはや真剣とそんなに変わらない物が一本だけな。

それ以外の模造刀は顧問が手入れの目的で持ち帰ってしまった。

あとは…本物の刀が俺の家に家宝として伝わっているが、わざわざ取りに行っている暇もないだろう？」

「ならば部室に置いてあるものを取りに行こう。

幸いなことに、居合道部の部室はすぐそこだからな」

保健室から居合道部の部室はかなり近い。

というのも、新入生がよく抜刀や納刀の際によく手を怪我して出血事故を起こすからだ。

そんな訳で俺や居合道部の顧問が学校に掛けあつて、部室を保健室のすぐ近くに移動させた。

…まさか、馬鹿な後輩や新入生がこんな所で役に立つとは…

「分かったわ、それじゃあすぐに刀を取って職員室に向かいましよう」

「了解」

俺達は保健室から部室へ向かった。

「あつた、これだ」

途中で奴らを何体が潰してから部室へと入り、刀を入れてあるはずのロッカーを漁る。

いろいろなものが入っていたが、漁りだしてすぐに刀は見つかった。

「…」

刀を鞘から抜き、刃を調べる。

鞘から抜き放たれた刀は鈍い光を放ち、手に確かな重量感を伝えてくる。

…刃こぼれは見つからなく、重量も申し分ない。とりあえずではあるが、問題なく使えるだろう。

「それが後輩が研いだという刀か」

「ああ、冴子が使つか？俺は木刀でも構わんからな」

「いや、翔が使うといい。」

その刀は翔のほう慣れているだろうからな」

冴子は笑いながら答えを返してきた。

確かに現状では慣れている物が一番だな、ヘタに新モノに手を出して怪我などしたら医療品がもつたいない。

「それでは行くぞ」

「ああ…先生は俺達の後を付いてきてください」

「ええ」

再び廊下を走りだす、目的地は職員室。フォーメーションは冴子、俺、先生の順。

冴子が敵の足を止め隙を作り、俺が刀で奴らの首を刎ねていく。奴らは愚鈍なので外すようなことはなかった。

「しかし、アメリカでも同様の事件があつたはずだが…日本政府は何も対策はしていなかったのか？」

インターネットで知った情報だから、本当かどうかは知らないがアメリカでは

奴らが発生した時に備えてセーフハウスという物を作っているそうだ。

そのセーフハウスのおかげで助かったという事例も多数聞いている。また、感染者の対策にゾンブレックスという薬が市販されているらしいが…日本に輸入されているのだろうか？

いや、それ以前にアメリカはゾンブレックスを輸出しているのか？

「国としての対策は、永田町とかに避難所を作ってるらしいわ。」

保存食や飲料水、薬なども一年近くは持つ量を保管してあるみたい。

具体的な解決策が見つからない限り、一般市民とかには解放されないらしいけど…」

相変わらず自らの保身にしか走らないのか、この国の官僚は。

だから他の国から『日本の政治家は屑ばかり』と言われるんだ。

絶望的とも言える先生の言葉に、内心舌打ちをした。

「しかし、何故キーを職員室に置いているんだ？

車のキーは貴重品、普通なら肌身離さず持ち歩いているべきだろう？。」

冴子がかもつともな疑問を出す。

「…多分バッグの中に入ってるかもしれないけど…」

「だからって、わざわざ立ち止まって確認する暇もないですね」

こんな所で足を止めたらたちまち奴らの餌食だ。

そんな状況の中で、鞆の中を確認する余裕なんてない。

「時間を稼ぐという目的でも、職員室に向かわなければならぬか。

まったく、面倒なことだ」

「ボヤくなよ、職員室なら他の教室と比べて扉も頑丈だし、鍵も付いているから少しは休めるはずだ。

…むっ！」

横から奴らが一体飛び出してきた。

奴らを目視した俺は、刀を首めがけ振り抜く。

振り抜かれた刃は奴らの首を落とし、血を舞い上がらせる。

「ちえいさつ！！」

そして俺は落ちた首を思いっきり蹴り飛ばす。

蹴り飛ばされた首は窓ガラスを突き破り、そのまま飛んでいった。

「翔」

「どうした？」

「奴らと出会った際に一々首を刎ねる必要はない。

確かにお前は一太刀で仕留められているが、それでもかなりの足止めになっているぞ。

丈夫な鞘があるのだから、それで敵を打ち足を止める程度で構わない」

冴子が俺に駄目出しをしてきた。

：言われてみれば、先程から冴子は足止め程度の突きか払いしかしていないな。

足をとめる、か。そう言えばこれは殲滅ではなく逃走が目的だった。なるほど、わざわざ敵の首を刎ねる必要もないか。

首を刎ねれば刎ねるほど、刀の耐久度も下がっていくんだからな。

ちなみに先生は非戦闘要員なので論外だ、最初から期待はしていない。

「ひゃんっ」

後ろから気の抜けるような声と、何かがぶつかるような音が聞こえた。

先生になにかあったのか？

「なんなのよー」

振り返ると、そこにはへたり込んでいる先生がいた。
床に血溜まりが広がっているのを見ると、それに滑って転んだのか
もしれない。

走りにくそうな靴を履いているし、転んでもしょうがないだろう。

「走るには向かないファッションだからだ」

冴子は先生の前にしゃがみこみ、いきなり先生のスカートを破き大
きな切れ目をいれた。

「ん」

チャイナドレスと同等…いや、それ以上のスリットが生まれたスカ
ートからは、先生の白く長い足が丸見えだ。

場合によっては下着まで見えそうだ…一応ではあるが俺も立派な男
子、当然というべきか視線はそこに向かった。

だが、今は緊急事態。興奮している余裕なんてない。

「冴子、終わったなら急ぐぞ」

「ああ」

先生は無事なようだし、いつまでもここで足を止めているわけにも
いかない。

これ以上何も無いならさっさと移動するべきである。

「ちょ、ちょっと待ってよお！」

先生が慌てて後を追ってきた。

…走り続けていると、職員室が見えた。職員室の近くには一組の男

女の姿が見える。

男女の近くには…敵である奴らの姿が…率直に言えば囲まれているな。

あの二人組を救うならば、さっさと仕留めないとマズいな。

「翔！右の二体をやるぞ！」

「了解」

いつの間にか近くにいたもう人組の男女とも、アイコンタクトを交わす。

そして、冴子の指令が届き、それに抑揚のない声で返事をした。

（余計なことは考えるな、ただ刀を走らせるだけ…）

目標の奴らへと向かって走る。

先を走っていた冴子が強烈な面を繰り出し、奴らの足を止めた。

俺は敵が足を止めた隙に、刀を走らせ一閃を煌かせ首を落とした。

（この短時間の間で…首を落とすのにも慣れてしまったな）

奴らに繰り出す介錯の一太刀はほんの数分の間に作業と化してしまっ
った。

舞い上がる血柱を見つめながら、そんな事を思ってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9776p/>

学園黙示録 もう一人の三年生

2011年10月9日23時59分発行